情報セキュリティーと日本人

情報処理センター長　川下智幸

ネットワークの信頼を揺るがしているのが、コンピュータ・ウイルスである。それらは悪意のある人によって作られたコンピュータのプログラムの一種であるが、その犯罪者の多くは、いわゆる愉快犯だと言われている。また、犯罪心理の面では、ネット社会特有の「匿名性と親密さ」の両立が可能な世界であることが大きな要因であるという分析がなされている。心理学の実験によれば、人は自分の名前を知られず、罪を受けないときには、乱暴になりやすいといった報告もある。まさに、匿名性のヨロイを着ることができるネット社会では、起こるべきして起こっている犯罪なのかもしれない。

数年前、ベストセラーになった『国家の品格』の著者である、お茶の水女子大教授の藤原正彦先生の言葉を思い出す。『日本人は歴史上、金銭至上主義からもっとも遠い国だった。例えば、フランシスコ・ザビエルが１５４９年に来日して最初に驚いたのは、貧しい武士が金持ちの町人に尊敬されていたこと。武士は権力と教養を身につけても、金はもたなかった。それでも尊敬されていたのは、高邁な武士道精神、非常に高い行動基準のもとに生きていたからだ』。もちろん、現在社会に武士道と言われてもおかしい話とお笑いになると思うが、私は、日本特有の精神文化からすれば、ネットワークを乱す行為は、世界中で最も似合わない民族だと思う。しかし、これだけグローバル化した国際社会の中で、日本人らしい高邁な武士道精神、非常に高い行動基準を備えるのは並大抵なことではない。もしそれが実現されたら、世界中の人から、単に高い技術力がある国と認識されるだけでなく、人間的にも尊敬される国になるのは間違いない。それは、近い将来、技術者として、世界を駆け回る佐世保高専生にふさわしい姿と期待している。そのためには、今、何が必要か？答えは、明確で「教育をしっかり行う」である。

ネットワークに限定した考えならネットワークリテラシーの教育であろう。例えば、新入生を対象に実施している携帯電話のマナー講習会もその１つである。すでに、情報処理関連の授業では、継続的に、ネットワークリテラシーに関した教育を行っていると聞く。この効果は、すぐに期待できないかもしれない。しかし、卒業後働く環境の中で、ネットワークを活用していない企業はないことを考えれば、まず私たち教員・職員が高い行動基準でネットワークを活用すること、そして、学生に「日々、話して教える」ことが重要で必要なことではないだろうか。